

## DLA 〈話す〉 概要

### (1) 目的

- ・日本生まれの外国人児童生徒や学齢期に来日した子どもが、学校生活を通してまず最初に身につけるのが会話力です。毎日出会う教師や仲間となんとかコミュニケーションをとろうとして会話力の基礎が発達し、この会話力を土台として読む力、書く力が伸びていきます。**DLA 〈話す〉**は、教科学習言語能力の基礎となる大事な会話力を多面的に測るものです。
- ・**DLA 〈話す〉**は、話す力を3面で捉えます。3面とは、基礎会話・対話・認知の3つです。
- ・基礎的な文型や語彙を使って応答する基礎会話面を《基礎タスク》で、一対一でのやりとりに参加して与えられたタスクをこなせる対話面を《対話タスク》で、自分の考えや意見をまとめて述べる認知面を《認知タスク》によって測ります。この3面からトータルな「話す力」のレベルを推定します。
- ・**DLA 〈話す〉**は、場面に依存して対応できる言語能力から認知力を必要とする言語能力まで、幅広い話す力を見ようとするものです。

### (2) 対象

- ・**DLA 〈話す〉**は、やっと最低限の受け答えができる子どもから流暢に話せる子どもまで、幅広いレベルの子どもを対象とします。
- ・ただし、〈はじめの一步〉でほとんど受け答えが成立しなかった子どもには実施できません。

### (3) 方法

- ・**DLA 〈話す〉**実践ガイド (p28-30) に沿って、《基礎タスク》《対話タスク》《認知タスク》の順で実施します。
- ・子どもに無理強いをしてはいけないので、日本語の習得レベルによって《基礎タスク》で終了する場合や《対話タスク》で終了する場合もあり、《認知タスク》まで行って終了する場合があります。
- ・**DLA 〈話す〉**では、3種類の絵カードを使います。巻末資料の絵カードのうち、ピンクの枠の絵カードは《基礎タスク》のための基礎カード、黄色の枠は《対話タスク》のための対話カード、ブルーの枠は《認知タスク》のための認知カードです。使用に際しては、切り取ってカードにしてください。
- ・基礎カードは3枚、対話カードは4枚あります。順番に使用してください。
- ・認知カードは7枚ありますが、子どもの年齢に応じてその中から3、4枚を選んで使用します。(低学年の場合は2枚)

### (4) 構成

- ・**DLA 〈話す〉**は、次の4つから構成されています。
  - ① 「**DLA 〈話す〉**実践ガイド」 (p28-30)  
実践ガイドに沿って《基礎タスク》《対話タスク》《認知タスク》を行います。
  - ② 「**DLA 〈話す〉**基礎・対話・認知カード」 (巻末資料)  
実践ガイドに沿って該当するカードを使用します。
  - ③ 「**DLA 〈話す〉**診断シート」 (p31-35)  
**DLA 〈話す〉**を実施したあと、採点・評価に使用します。

④ 「 JSL評価参照枠〈話す〉 」 (p36)

採点・評価の結果を診断シートに記入した後、このJSL評価参照枠〈話す〉 に照らし合わせて、日本語習得のステージを推定し、どの程度の学習支援が必要かを判断します。

⑤ 「 DLA 実施レポート 」・「 DLA採点表〈全体評価〉 」 (第7章)

「診断シート」で得られた結果を記入します。

## (5) 実施の前に

- 対象となる児童生徒に合わせて使いたい認知カードをあらかじめ選び、基礎カード・対話カードと合わせて順番に揃えておきます。

⇒ 認知カードを選ぶ際は【絵カードの種類と対象年齢】を参照してください。

(子どもの様子に応じてその場で変えてもかまいませんが、迷って時間をとってしまうないように見当をつけて用意しておくことをおすすめします。)

### 用意するもの

- 録音(録画)機器
- 使用する絵カード(基礎カード3枚、対話カード4枚、認知カード7枚のうち3、4枚(低学年は2枚))
- DLA〈話す〉実践ガイド

【絵カードの種類と対象年齢】

	絵カード	小学校 低学年	小学校 中学年	小学校 高学年	中学生
基礎 タスク	1.教室	○	○	○	○
	2.スポーツ	○	○	○	○
	3.日課	○	○	○	○
対話 タスク	4.先生に質問	○	○	○	○
	5.新しい先生	○	○	○	○
	6.友達を誘う	○	○	○	○
	7.キャッチボール事件	○	○	○	○
認知 タスク	8.お話	○	○		
	9.消防車	○	○		
	10.キャッチボール事件の報告		○	○	○
	11.環境問題		○	○	○
	12.地震		○	○	○
	13.水の世界			○	○
	14.蝶の一生			○	○

○は年齢に適しているカード、○のないカードは認知レベルが適していないもの。  
(詳細は、次頁からの「各絵カードのねらい」をご覧ください。)

## 各絵カードのねらい

◇「基礎タスク」は、初期日本語指導の段階で学習する文型の定着度を測るものです。



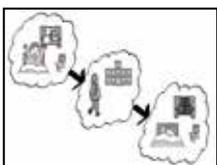
(1)「教室」

□ねらい: 存在動詞「ある・いる」を使って、物や人の存在について表現できるかどうかを見ます。2年生以上では、時間の読み方も聞きます。



(2)「スポーツ」

□ねらい: 「したことがあるか・ないか」(過去の経験)、「できる・できない」(可能表現)、「好きか・嫌いか」、「どちらが好きか」(比較)などの問いに答える力を見ます。



(3)「日課<起床><登校><就寝>」

□ねらい: 動詞の現在形(習慣)と過去形の使い分け、「～て、～て」のように時系列で行動を表現する力を見ます。

◇「対話タスク」は、状況・必要に応じて自ら発話し、会話をリードする力を測定します。



(4)「先生に質問」A,B

□ねらい: 教室で授業中にトイレに行ってもよいかどうか許可を求めることができるかどうかを見ます。また、教科書を忘れ、隣の友だちに貸してもらいたいなどの依頼ができるかどうかを見ます。



(5)「新しい先生」

□ねらい: 新しい先生に自己紹介をしたり、先生に質問をしたりすることができるかどうかを見ます。



(6)「友達を誘う」

□ねらい: 友だちを誘うことができるかどうかを見ます。  
会話をリードする力を見ます。(実施者は友だちの役割をします。)



(7)「キャッチボール事件」

□ねらい: キャッチボールをしていて、窓ガラスを割ってしまったと女の人(その家の人)に伝えて、丁寧に謝ることができるかどうかを見ます。

◇「認知タスク」は、教科内容と関連した内容について、まとまりのある話ができるかどうかを見ます。子どもの発達に応じて7つのカードの中から3、4枚（低学年は2枚）選びます。



(8)「お話し」カード

□ねらい: 3つの絵からなじみのあるものを選び、ストーリーを再生できるかどうかを見ます。3つのお話以外のお話でもいいです。



(9)「消防車」カード

□ねらい: 2台の車について、どんな役割があるか共通点と相違点について話せるかどうかを見ます。



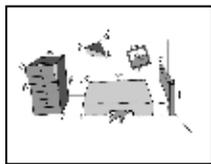
(10)「キャッチボール事件の報告」カード

□ねらい: 「キャッチボール事件」カード(7)を使って、起こったことを理由をふまえて先生に報告(説明)できるかどうかを見ます。



(11)「環境問題」カード

□ねらい: 地球が今どうなっているか説明する力を見ます。地球のために何ができるか意見が言えるかを見ます。中学生では、温暖化の要因・仕組みを説明できるかを見ます。



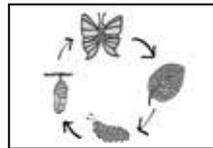
(12)「地震」カード

□ねらい: 地震の体験談を話せるかどうかを見ます。また、地震の時どうしたらよいか意見が言えるか、また、中学生では地震の要因・仕組みを説明できるかを見ます。



(13)「水の循環」カード

□ねらい: 教科の用語を使って、水の循環の仕組みを説明できるかどうかを見ます。また、水の循環に欠かせない太陽がなかったらどうなるかという質問から、仮定の出来事に対して根拠を示して答えられるかどうかを見ます。



(14)「蝶の一生」カード

□ねらい: 理科の用語を使って、卵から幼虫、さなぎ、成虫になる変化について説明できるかどうかを見ます。

## (6) 実施手順

### カードの使い方・座り方

- ・カードは使用する順に積み重ね、伏せて置きます。一番上のカードを裏返すと必要なカードが現れるように重ねてください。
- ・座り方は、子どもの正面に向き合わずに、机の角などを使って座り、カードが子どもと実施者の両者から見えるように置いてください。

### 録音機のスイッチを入れる

- ・録音機の状態を確かめ、スイッチを入れてから、**DLA**〈話す〉を始めます。
- ・〈はじめの一步〉に続けて実施する場合はすでに録音機のスイッチは入っています。

### タスクの実施

- ・**DLA**〈話す〉実践ガイドの「実施者の発話」(☺マーク)に書いてある通りに話します。
- ・カードを一枚ずつめくりながら、対話を進めていきます。
- ・《基礎タスク》《対話タスク》《認知タスク》の順に進めていきますが、どうしても対話が続き子どもが沈黙してしまう状態が続いたら、《基礎タスク》もしくは《対話タスク》の段階で終わってもかまいません。

## (7) 実施上の留意点

### <流れを重視する>

- ・基礎タスク、対話タスク、認知タスクは、それぞれ途中でとまらず実践ガイドに沿って一気に行います。そのために、会話の流れを頭に入れておく必要があります。
- ・途中で児童生徒の発話を遮ったり、否定したり、訂正しないでください。  
実施者の質問が分からない場合は、文言を変えずに3度ぐらい繰り返してください。  
それでも分からない場合は、そこで流れを止めずにつぎの作業に移ってください。

### <対話中は採点しない>

- ・子どもの面前で診断シートを使って採点評価をしないでください。採点評価は実施後に行います。正確な評価、記録のために録音をしましょう。

### <ほめておわる>

- ・どんな日本語レベルであっても、最後には、日本語を「話した」ということを前向きに高く評価して終わってください。

## (8) 評価の方法

- ・録音を聞きながら採点・評価をします。

### 評価の手順

- ・まず診断シート (p31-34) を使用し、質問に答えられたか・タスクが実施できたかについて平均点を出し(量的評価)、次に、その結果を踏まえ、質的評価シート (p35) で回答の質について平均点を出します。この二つを併用してJSL評価参照枠〈話す〉 (p36) のステージの判定を行います。
- ・量的評価は「正答」「無回答」の2択で行います。評価者の問いに対して意味のある回答ができれば「正答」、質問が理解できなかつたり不適切な返答もしくは無回答の場合には「無回答」にチェックします。
- ・質的評価は5点(とてもよい)、3点(ふつう)、1点(もうすこし)のあてはまるものに○をつけます。

### 評価項目とJSL評価参照枠との関係

- ・質的評価シートの評価項目はJSL評価参照枠の項目に対応しています。
- ・評価結果と参照枠の記述を総合的に照らし合わせて、ステージを判定してください。